A.Ch. カトルメール・ド・カンシー及び G.C. アルガンの
類型概念について都市建築における沈殿された意味の蘇生とその脱構築(3)¹⁾NOTION OF TYPE IN A.CH. QUATREMERE DE QUINCY
AND G.C. ARGANReactivation of sedimented meanings and their deconstruction
in urban architecture (3)

松政貞治*

Teiji MATSUMASA

According to Quatremère de Quincy, the type is a "preexistent germ", a "core" that enables all the mouvements of historicity. The type works as a vertical axis of all the phases of idiomatic stratifications of meanings of the urban architecture. The nature of the type is the intertextual specificity around the historicity. To become conscious of the intertextuality of type is to reconfigure all the relations of sedimented meanings after their reactivation. It is the invention that is to deconstruct the typological sedimentation reconfigured by the reactivation on the intertextual structure of the type. As Argan, different from Quatremère, could not sufficiently take account of the relation among the nature to imitate, the type, the imitation and the invention, he could not understand it precisely.

Keywords : *Quatremère de Quincy, Argan, type, typology, urban architecture, deconstruction*

カトルメール・ド・カンシー、アルガン、類型、類型学、都市建築、脱構築

1. はじめに

先行する二つの論稿において²⁾、都市建築の生成を沈殿された意味の蘇生とその脱構築という観点から捉え、都市建築の意味の運動を保証する間テクスト性 (Intertextualité: 意味の織物としてのテキストの相互関係性) に関与する概念として模倣を採り挙げ、「自然 Nature」や「創出 Invention」との関係においてこの概念の可能性を詳論した。今回は、間テクスト性に関係する概念としては模倣 Imitation と共に重要と思われる類型概念 Type を、両概念について極めて興味深い考察を加えた A.Ch. カトルメール・ド・カンシー (1755-1849) の論稿と、自然や模倣と類型との関係には触れずに創出との関係において類型に強い関心を抱きその現代的意義を最初に問題にした G.C. アルガン (1909-92) の論稿の吟味を通じて比較解釈学的に措定し、都市建築を論じるための基本的考察の一環としたい。

2. カトルメール・ド・カンシーの類型概念

2.1 先在する萌芽としての類型

カトルメールによれば「"類型" という語は、転写すべきかあるいは完全に模倣すべきあるもののイメージを

現すよりも寧ろ、それ自体モデルへの規則に供するはずのある要素の観念を現す」³⁾。「かくかくのモチーフ、かくかくの創出によってかくかくの観念において」類型は芸術家に与えられなければならない。モデルがひとつの対象であるとしても我々がそれそのものとして反復すべき、あるいは再現すべき対象であるのに対して、類型もある種の対象であるが、互いに「似ること」は有り得ない作品をそれによって各人が構想することができるような対象である。次にこの概念は一層正確に、そして適合するように、我々がこれまで論及してきたあらゆる概念や観念に拡張される概念的空間の中で定位される：

「全ての国において、この公正な建てる芸術は先在する萌芽 un germe préexistant から生まれる。あらゆるものには先行するもの un antécédent がなければならない。如何なるジャンルにおいても無からは何も生じない。そしてこのことが人間の全ての創出に適用されないということには有り得ない。また全ての創出は、後に変更を受けるとしても、それらの基本原則を常に目に見えるものとして、感覚や理性に常に感じ得るものとして保持してきたのである。それはある種の核 noyau であって、その周囲にこそ、対象が受容した形態の発展や変化が凝集され、続いてそれに対して合体されるのである。このようにして我々はあらゆるジャンルにおいて数多くの事象に辿り着いた。そして科学と哲学が自らの存在理由を把握するために為さねばならない主要な仕事のひとつは、自らの起源と第一原因 la cause primitive を探求

* 大阪大学工学部環境工学科 助手・仏国第三課程博士

Research Assoc., Dept. of Environmental Engineering, Faculty of Engineering, Osaka Univ., Architecte D.P.L.G. C.E.A.A.

することである。これこそが、人間の他のあらゆる創出や制定 institution におけると同様に、建築においても類型と呼ばなければならないものである。」⁴⁾

「ある種の核」、それを通じてこそ我々は、意味論的創出やコンテクスト的歪み、集団記憶の類推、戦略的「接ぎ木」、建築的「脱構築」とは何なのかを自問することが可能となる。建築における起源や第一原因の探求が許されるのは逆のベクトルとしてでしか有り得ない。そして、この核の周囲に凝集され合体される「対象が受容した形態や変化」とは、当然、建築や都市の機能性をも含意する。機能そのものの歴史的相対性を甘受し認証する歴史意識は、類型意識と照応されることによって、「創造の天才」の無歴史性を、あるいは機能の普遍的客観性を信奉することが如何に素朴であるのかを明らかにするのである。

「我々は、文明の始まりを有する社会の起源に遡る時、諸原因からそして十分に一律的な方法と共に至る所で、建てる芸術が生じるのを目の当たりにする」⁵⁾。この重要な見方を社会学的なあるいは歴史的な局面だけに限定することはできない。都市の建築が、混沌ではなく都市建築的な個性を集团的に有していれば、たとえそれが画一的、均質的なものであっても、形態、空間の雰囲気、色彩、素材、機能、力学的構造的性、有用性 Utilité、必要性 Nécessité、適合性 Convenance などのあらゆる局面において、その都市の場所の固有性が抽象されるはずである。先在する萌芽としての類型は、こうした沈積のあらゆる位相のいわば垂直の軸として作用する。換言すれば、そのような全ての具体的な事態を担いながらも、様々な建築的固有語 Idiom 他生性由来する差異化、異なる固有語から抽象される相同性から生じる反復、そして同形的な固有語の対立や脱構築を通じてのあるいは逆に異形的な固有語の「接ぎ木」を通じての建築的意味作用の賭けそのもの、こうした有り得べき、あるいは「志向化」され得る全ての運動あるいは審級 Instance は、類型という「核」の周囲において初めて捉えられるからである。

2-2. 自然の模倣と根本的構造としての類型

このテキストの続く部分は上述の関心と一致する：

「建築が物理的あるいは物質的自然の如何なる創造物のイメージでも有り得ず、またそれを与えることも有り得ないという理由で、感覚的な対象に関係づけられる模倣以外のジャンルの模倣を構想しなかったり、この芸術においては全てが気まぐれや偶然に従いまた従わされる宿命にあると主張する者がいる。彼らは、眼に対してそのモデル modèle を指し示す模倣以外の模倣など想像もつかないから、類推による、知的関係による、諸原則の適用による、手法や結合、理性、体系の適用による精神的な模倣のあらゆる段階を誤解している。だから直ちに彼らは建築において、隠喩的な模倣 imitation métaphorique に基礎を置くものを否定し、この模倣が物質的に必要ではないからという理由でそれを否定するのである。精確な類似というモチーフあるいは手段を求めることも与えることもできない類型的観念（事象の本来的な理由 raison originnaire de la chose）と、形態的な類似性に縛り付けるモデルの観念（完結した事象 chose complète）とを彼らは混同する。

寸法が表すような精確さを類型が持ち合わせていないことを理由にして、彼らはそれを夢想的な投機 spéculation として遺棄するのである。」⁶⁾

「感覚的な対象に関係づけられる模倣以外のジャンルの模倣」をのみ本質的な概念と考えるカトルメールは、「隠喩的な模倣に基礎を置くもの」にこそ注目し、そこから現代の都市や建築に関する理論においてもしばしばその影響が見られる、類型とモデルの重要な識別を提示している。

そしてここで、類型と模倣との関係が鮮明に記述されている。一方で、「感覚的な対象に関係づけられる模倣」や「気まぐれや偶然」に従いながら「眼に対してそのモデルを指し示す模倣」にのみ関心を示し、「形態的な類似性に縛り付けるモデルの観念」を「完結した事象」と捉え、「寸法が表すような精確さ」を求める者たちが批判される。彼らは、表層的な現象としての、モデルと「明確な模倣」との関係にのみ拘泥する。他方、「感覚的な対象に関係づけられる模倣以外のジャンルの模倣」、「類推による、知的関係による、諸原則の適用による、手法や結合、理性、体系の適用による精神的な模倣」、「隠喩的な模倣」は、「精確な類似というモチーフあるいは手段を求めることも与えることもできない類型的観念」の、つまり諸事象の本来の原因の、現れ方、表し方に他ならない。この場合、模倣が間テクスト性の現れ方、表し方であるとするなら、類型は間テクスト性そのものを保証する核、あるいはその原因である。

類型の存在を暗示する模倣は、「快 Plaisir」と密接な関係を有している。第一原因としての自然が、時間性や人間の感性的理念性の衣をまとうことによって、「根本的構造」としての類型となる。自然を構造化する理性の働きから結実するものが根本的構造としての類型である。従って、自然を模倣することから生じる「快」は、類型の存在を暗示することに基づいており、自然の模倣は、類型を具体化したものと、つまり類型学と、密接な関係を有するのである⁷⁾。自然と類型という、いわば第一原因と理性的原因そのものが、形態や空間という現象の現象性（意味）として、そして歴史性（意味）として⁸⁾、感性的に把握されることによって、「快」が生まれるのであり、その特殊なものとして「美」が意識されるのである⁹⁾。更にこの快は、人間の共同主観性 Intersubjectivité に根ざして生成され、時と共に熟成される集団記憶や共同言語性を伴うことによって、人間の自己疎外や実存的「不安」を和らげる働きをも有するのである¹⁰⁾。

2-3. カトルメールの類型の脱構築的契機

元来、カトルメールはカント派の美学者であった。美学的伝統の流れの中で、快楽主義的あるいは遊戯的芸術創造のカント的定義や芸術的賭けのシラー的観念、あるいはゲーテの虚構性の恩恵を得て、カトルメールは建築の理論や哲学を再構成したのである。その中で彼は、と

りわけ類型やモデル、慣習 Convention といった概念から建築を再構築しようとしていた¹¹⁾。

ところで、両者に時代的な差があるとはいえ、カトルメールの類型の脱構築的側面を観察するためには、異化作用を中心主題とする美学思潮であるロシア・フォルマリスムとの比較がとりわけ興味深い。ロシア・フォルマリスムの理論家である J. シクロフスキーが、対象の美学的地位を同定したばかりでなく、メッセージを脱コード化しようとする者の異化とその芸術的価値との関係を形成したのに対して、カトルメールは逆に、対象そのものの諸関係ではなく、従って対象そのものの模倣ではなく、自然や理念あるいは様式の模倣としてミメシスを常に正当化する。ロシア・フォルマリスムが詩作を同じ規範からの出口、つまり慣習からの例外化、既存の意味作用の再活性化、芸術的規範及び手順の新たな伝統への再登録と規定しているのに対して、カトルメールにおいて模倣は、諸規則からの逸脱あるいは例外化の契機、芸術的創造性及び自由の価値への信頼の契機、そして厳格なモデルの無視の契機であるように思われる。これは沈殿された意味を意味論的刷新として解放し蘇生させる隠喩の理論にも通じている¹²⁾。

カトルメールは、模倣において、対象の同一的反復による類似性を否定し、対象のイメージや類推に基づく類似性をこそ、模倣すべき自然に還元し得る模倣の本質であると見做していたのに対応して、その逆のベクトルとしての「創出」に関しても、我々は、対象同士の関係としての逸脱や差異性つまり形態的語彙の変形や解体ではなく、対象のイメージや類推同士の逸脱あるいは差異化の可能性を内包する歴史性と伝承可能性の契機こそが類型の本質であると明言しなければならない。ここにこそ、類型意識に基づかない創造の待望（例えばロシア・フォルマリスムの異化作用）と、類型との相互作用によって初めて可能とされるいわば類型論的脱構築との相違が見い出されるのである。

また、個人における芸術的営為と固有の規則を有するある種の賭けとを比較しながら、この賭けが作り出されるためにはこれらの規則が互いに尊重されなければならないのであるが、カトルメールは、模倣と人間との間に、この種の賭けを動機づけ、そしてそれらの手段となるような何らかの相互性の条件が存在するのだとしている。彼にとってはこの賭けの目的は勝つことではなく、その勝利と同様に合法的あるいは非合法的で有り得る快である。勝利を合法的にするものはまたそれを空虚にするものである。効果が生み出され受け取られるのはひとつの条件を通じてであり、模倣における快を台無しにするのはこの条件を錯乱させようとするものである。習慣と慣例こそが、模倣と人間の間で生まれ、そして事象の自然そのものが打ち立てた調和の様々な類型に、慣習

Convention という名を与えるのである。ロシア・フォルマリスムにおいては、慣習は理論の形で、古代のモデルのある種の脱構築へと向かう新たな概念として導入される。カトルメールにおいては、模倣との関係の中で社会的、文化的、歴史的そしてとりわけ慣習的な類型という概念を錬成するために、何よりもまず先在する文化的モデルを考慮しなければならないとされる。そして彼によれば、それは究極的には「ひとつの共通のモデル」としての自然に還元されなければならないのである¹³⁾。

3. ジュリオ・カルロ・アルガンの類型概念

カトルメール・ド・カンシーによって初めて本格的に記述された類型概念は、その後の多くの美学者や歴史家、建築家、建築論学者に影響を与えたが、大きな成果として結実するには、イタリアのジュリオ・カルロ・アルガン Giulio Carlo Argan (1909-92) を待たねばならなかった。第一次大戦後のイデオロギー批判を通じて、インターナショナリズムや合理主義が近代主義の主流となる。しかし第二次大戦という苛酷な体験を経た後には、もはや、容易に体現可能な工業技術を建築表現として謳歌することよりも、沈殿した固有の文化や都市を継承しながら、新たな思想を、ナショナリズムやファシズムとはなり得ない普遍的な理念を礎にし、荒廃した戦後の状況にどのようにして着床させられるのかが、とりわけイタリアでは論議されていた。そのような中で、芸術史家として建築の問題に強い関心を抱き、またローマ市長にも就任したアルガンは、過去と未来の連続性の中に現在の意義と責任を見い出そうとするカトルメールに逸早く注目し、ローマの都市形成の理念と重ね合わせながら、カトルメールの類型論の現代的意義を引き出そうとしたのである。

アルガンが自らの類型意識を吐露する形で著した「建築類型の概念について」¹⁴⁾は比較的短い論稿ではあるが、そこに凝集された内容の重要性のために、発表されて間もなくイタリア国内に留まらず世界各国で注目された。数か国語に翻訳されたこともあって、発表後しばらくは、多くの研究者や建築家がこの論稿について論及している。ここではこの論稿の論点を詳しく吟味することによって、カトルメールによって本格的に展開された類型概念が、どのように深化され発展されたのか、あるいは逆にどのようなプロブレマティック（問題圏）に限定され、縮減されたのかを検討し、都市建築を語るための基本的な研究として提起しなければならない。

3.1 建築類型学の周辺と「先行性の問い」

まずアルガンは、建築類型学の価値が無視されている近代の批評の状況を指摘し、この看過の重大な病理を明らかにしている。仮に類型という言葉が使われる場合でも、実はその殆ど全ては、歴史性のダイナミズムに関係づけられた「生きた」類型としてではなく、何らかの理

想主義的なあるいは観念論的な範型として、自ら「創造」した作品や自らが批評する対象としての作品を正統化あるいは理念化するために、無批判的に、時としてイデオロギー（虚偽意識）的に仮想される抽象的な「モデル」であることが糾弾される：

「実際、円形神殿の観念的「類型」に最も近づけばそれだけその円形神殿の芸術的価値が大きいのだと主張しても、愚かなことだろう。この観念的「類型」は抽象に他ならず、従って、建築類型によって個々の芸術作品の評価基準が構築されるという考えを除外しなければならない。」¹⁶

批評と観念的類型の共犯関係にも拘わらず、建築の歴史的展開や個人の創作過程の中に理論的にあるいは実践的に形成され変形されてきた類型学の存在とその歴史的理念的意義をも指摘することによって、アルガンは類型学の正当性を慎ましく表明する：

「従って、建築の歴史過程及び一人の建築家個人の知的及び操作的過程のひとつの作用として、類型学の問題を提起することは、正当なことである。」¹⁶

具体的に類型学に迫るためにアルガンはまず関連する領域との比較を試み、建築の類型学と図像研究の間の類推を指摘する：

「図像芸術の図像研究と同様に類型学は、芸術的過程において多かれ少なかれ明白な方法で、確かに決定的ではないがしかし常に現存する要因を構成するからである。」¹⁷

更に類型学とは何かを語るために、もうひとつの関連領域としての象徴作用あるいは象徴主義との比較によって、象徴と形態あるいは類型との時間的な従属関係、因果関係が、「先行性の問い」として措定される：

「ひとつの建築類型はどのように形成されるのだろうか。諸類型の価値と機能を認める傾向が最も著しい流行している批評は、象徴主義やそれに結び付けられた儀礼慣習と関連させながら建築諸形態を説明しようとするものである。しかしこうした批評は、その象徴主義が類型の誕生より前に存在し、その類型を決定づけるものなのか、あるいは逆に後でそこから演繹されるものなのかを知らうとする問いには答えられない（あるいは答えられないでいる）。我々が歴史展開の問題に思いを寄せる時、「先行性」の問いは、固有な重要性を必ずしも有する訳ではない。象徴的意味作用が類型より前に存在しそれを決定づける時、類型は、ある種の建築形態に連関されながら転移され、逆の場合には、同様に諸形態の歴史的連鎖が、多かれ少なかれ意識的に、象徴的内容を伝播するということが明白だからである。更には象徴的内容が、歴史的及び美的観点からでさえ、古い形態的伝統との連関として意識的に研究され、本質的要因を構成する場合も存在する。」¹⁸

3.2 カトルメールの類型の曖昧性と構造的特性

このように、類型学とは何かを論究するために序論的にその周辺領域との最小限の関連を指摘した後、アルガンは類型学そのものの核心に入り込み、アルガンが引用したことによってカトルメールの名を世界中に知らすことになる一節を提示する：

「建築における類型についての正確な定義はカトルメール・ド・カンシーによって、その「歴史辞典」の中で与えられている。

「-- 類型という語は、転写すべきあるいは完全に模倣すべきあるもののイメージを現すよりも寧ろ、それ自体モデルへの規則に供するはずのある要素の観念を現す。-- モデルは、芸術の実践的活動において理解されているが、我々はそれそのものとしては反復しなければならない対象であり、逆に類型は、互いに類似しない作品を各人に

構想させ得る対象である。モデルにおいては全ては正確で、定められているが、類型においては全ては多かれ少なかれ曖昧である。また諸類型の模倣は、感情や精神が認識できないようなものは何も持たないということが分かるだろう--」

類型の曖昧で総称的な性格の概念は、それ故形態の創出や美的特質に直接影響することはできないが、類型の発生や形成方式については説明してくれる。明らかにそれはア・プリオリに定式化されることは決してなく、一連の先例から演繹されるのである。円形神殿の類型はかくかくの円形神殿に同定可能なものでは決してなく（たとえあるひとつの決定づけられた建造物が、この場合にはバンテオンであるが、特別の重要性をこれまで持ち続けることができ、またそれを保持することができたとしても）、それは常に全ての円形神殿の照合の結果、実践上は重合の結果である。ある類型の誕生はそれ故、互いに明白な形態的及び機能的類推を有する一連の建造物群が既に存在するという事実によって条件づけられている。言い換えれば、ひとつの類型が建築の実践あるいは理論において定着される時、それはもはや、イデオロギー的、宗教的あるいは実践的な諸要求の総体に対する応答として、その文化の決定づけられた歴史的状況の中で存在するのである。」¹⁹

アルガンによれば、類型は、その曖昧性、変貌可能性という特徴のために、創造や美そのものに直接立ち会うことはないが、それらのためには、あるいは快を享受し歴史性の運動を意識化し共同的言語の対話に参加するためには、決して看過することのできないものとして措定される。類型の秘匿性と神秘性はそのア・プリオリ性にあるのではなく、より日常的な「一連の先例からの演繹性」によるのであり、また理念的客観性に基づく純粋な観念的範型への同一化的寄託ではなく、「互いに明白な形態的及び機能的類推を有する一連の」不純な歴史的沈殿物が存在するという事実性とそれらを照合ないし重合しようとする人間の欲求にこそ隠されているのである：

「類型を画定するために個々の形態を比較し重ね合わせる過程の中で我々は、個々の建造物の特殊な性格を削除し、その系列の全単位の中で現われる全ての要素を（そして専らこれらのみを）保持するのである。このようにして類型は、形態的な変異体の総体をひとつの共通の基本形態に帰着させる過程を通じて演繹される図式として構築されるのである。類型がこの逆進過程の結果であるとしても、我々が関与にする基本形態は、ひとつの単純な構造枠としてではなく、形態の内在的構造、あるいは類型自体の後統的、構造的変形のような形態的変異体の可能性をそれ自身の内に含意する原則として了解され得るものである。実際に、たとえあるひとつの建造物の最終的形態が先行の形態的系列から演繹された類型のひとつの変異体であるとしても、その形態的系列への新たな変異体の付加が、必然的にひとつの変動、多かれ少なかれ類型の内部で刻印される変動を決定づけるだろうということを証明する必要はない。」²⁰

形態の変異体の総体の、ひとつの共通の基本形態への還元及び、歴史的に逆進する合目的過程のテロスは、まずカント的な図式として与えられる。それはア・プリオリ（先験的）で単純な構造枠でも、ア・ポストエリオリ（後験的）な静的構造でもなく、「形態の変異体の可能性」を含意するいわば動的で柔軟な構造として、言語学においてソシュールが提起した「安定した言語構造」と対比し得るものとしてここでは提起されている。

続いて、類型学と表面的な分類学や統計学との差異が明らかにされる。そして類型学と、類型学の誤った解釈が原因となってやがて台頭することが当然可能な、建築

類型の素朴な機能的分類との混同が指摘される。このいわゆるビルディングタイプの思考は、ここでは19世紀に特有なものとされているが、N. ベヴスナーの "History of Building Types" に限らず、20世紀にはあらゆる建築的思考の忌避すべきア・プリオリとして浸透していることも指摘しておかなければならないだろう：

「類型学の形成の過程が、分類的及び統計的過程であるばかりでなく美的で正確な合目的性を求めて導かれる過程であるということが、二つの基本的な事実によって示される。一方では、類型学的系列は、単に建造物の実践的諸機能と関係する建築の歴史の中だけで形成されるばかりでなく、とりわけそれらの布置との関係の中でこそ形成されるのである。例えば聖なる円形建造物の基本類型は、かくかくの建造物の中で完遂されるはずの十分に差異化された機能からは独立しているのである。19世紀の後半においてのみ、実践的機能を分類の原理と捉えながらひとつの類型学の構築が試みられた（病院、学校、銀行等の典型的図式）。しかしそれは重要な美学的結果を引き起こすものではなかった。歴史的類型、例えば集中形式か軸形式、あるいは両者を組み合わせた平面を持つ宗教建造物の類型は、偶然的な実践的諸要求を満たすことを目指したものではなく、少なくとも画定されたひとつの文明の限界の中で根本的で恒久的であると評価される深い要求に回答することを目指したものである。従って、これらの形態が未来においても保持し続けるであろう妥当性をこそ目指して、過去において鍊り上げられた経験を利用しなければならないのである。類型とは言えば、これも変異を被るものである。しかし形態のイデオロギー的な内容は、現在の中でひとつの強調あるいは特別な性格を引き受けることができる、あるいは引き受けなければならないにも拘らず、そうした内容が恒久的な基底を有していると考えられるのである。」²⁰⁾

類型は、ひとつの時代と集団に根ざした機能に限定されるものではなく、「深い要求への応答」として、時間的な連続性の基底となるべきものとされる。沈殿に参与する過去、蘇生を命とする現在、そして解体を甘受した変異を可能にする未来が、類型という軸によって貫かれるのである。

3.3 図式としての類型と模倣概念

続いて、都市建築の類型について論究するためには極めて本質的な「大きさ」の問題が関係づけられる。これは構造主義的思考による「構造レベル」に対応する²¹⁾。しかしここで挙げられている最大の構造レベルは、単体の建築物であって集団的な都市ではない。「建築類型の概念について」というタイトルからも明らかであるように、この論稿ではアルガン自身は都市的な脈絡についてはそれ程意識していなかったものと思われる：

「他方では、望めば望むだけの類型学的な類及び亜類を指定することが可能であるにも拘らず、通常は建築類型学は三つの大きなカテゴリー [範疇] に分けられる。第一のものは建造物の全体的な布置を包含し、第二のものは大きな構造要素を、そして第三のものは装飾的要素を包含する。第一のものの例としては集中形式か軸形式の平面を持つ建造物、第二の例としては陸屋根か円蓋の屋根、アーキトレープのシステムかアーチのシステムが、そして第三の例としては円柱のオーダーか装飾の詳細部などがある。このような分類が操作的な諸位相の継起（平面、建造システム、仕上げる装飾）に従って導かれるということ、そしてその目的が建築家に、彼の設計過程の全行程を通して、ひとつの類型学的な道案内を提供することにあるということも明白である。従って、建築家がひとつの類型に意識的に近づこうと試みたり、あるいはそれから遠ざかろうと試みたりするという意味においても、

また全ての建築作品が最終的にひとつの類型として位置づけられることを目指しているという意味においても、あらゆる建築設計企図の中には類型学的な相貌 [局面] が存在するのである。」²²⁾

系統的な結実としての「名誉ある作品簿」に登録されることが、確かに全ての創出の目的であり榮譽であるとしても、この登録内容は常に更新されるべき、あるいは書き換えられるべき宿命を持つのである。

続いて、芸術創造と類型の関係が問われる。類型がもし、安定化、精密化を志向するとすれば、それは自由な創出にとっては何らかの障害になりかねない。しかしこの対立は、芸術的創造と歴史的経験の一般の対立に帰着されることによって回避される：

「しかし類型がひとつの図式であり、そして図式が常に厳格性あるいは慣性の契機を構築するのであれば、芸術家の創造過程における図式が存在をどのように説明できるのだろうか。この問題は、芸術的創造と歴史的経験の関係という一般的な問題に容易に帰着される。この関係の故にこそ類型は常に歴史的経験から演繹されるのである。しかしながら、建築作品の設計図面を引く芸術家の創造過程において、何故、歴史の経験が、少なくとも部分的に、類型学的な図式として再現されるのかを我々は見ようとする。類型は、カトルメール・ド・カンシーが述べているように、ひとつの「対象」であるが、しかし「曖昧な」、あるいは漠然とした対象である。それは決定づけられた形態ではなく、ひとつの図式ないしは形態のひとつの設計である。この形態の設計は、芸術的形態として既に実現された諸形態の経験から結実するが、しかしそれらの特別な形態的あるいは芸術的価値を取り除いた形で、そうした形態を現前させるのである。より正確に言えば、この形態の設計は諸形態からそれらの性格や形態の特質を奪い、それらをひとつのイメージの、あるいはひとつの記号の価値に帰着させる。類型への還元の方途を通じて芸術家は、ひとつの決定づけられた歴史的形態の制約的影響力から解放され、彼はそれを中和するのである。彼は過去を、完遂された事実、従って新たな展開を被らないひとつの事実と捉える。カトルメールの定義に従いながら我々は、過去の芸術が芸術家を作品へと条件づけるモデルとして現われることを辞める時に類型が出現するのだと語ることができる。ひとつのモデルの選択はひとつの価値判断を意味する。決定づけられた芸術作品は完成されたものとして認識され、それを模倣することが試みられる。しかしその作品が類型の図式化傾向や漠然性に立ち返る時、芸術家の個人的営為を妨げるものはもはや価値判断ではない。類型は受容されるのであって、模倣されるのではない。つまり、美学思想の伝統においては「ミメシス」であるこの創造的過程を、類型の反復は排除するのである。結局、類型の受容の契機は、歴史的判断の中断の契機である。そしてそれはひとつの否定的な契機である。しかし、新たな価値の形成という意味において、形態の「志向を負った」契機である。それは、この否定性そのものによって、芸術家をして新たな画定の必然性の中に、創出の必然性の中に踏み込ませるのである。」²³⁾

類型は、芸術的価値や形態的性格、特質を取り除き、それらをイメージや記号の価値に帰着させる形態的設計である。完遂され停止した過去の芸術がモデルとして機能することを辞める時に、類型が出現する。ひとつの価値判断としてのモデルの選択がなされる時、そのモデルによる拘束と支配が始まる。素朴なあるいは怠惰な精神によってその模倣が試みられる。しかし、この場合それは、我々がカトルメールの模倣概念について既に論じたように、同一的な対象の反復としての模倣、「明確な」模倣であり、直接的に形態的な模倣である。イメージの類似性や類推に基づく自然の模倣ではない。自然からの

生成の過程についての省察のないままに反復に供されようとする古代の模倣や巨匠の模倣は、「決定づけられた芸術作品」としてひたすら固定化の道を辿るのみである。

ここに登場する模倣は、外見上は否定的なものとして記述されているが、模倣概念だけについて考える時、糾弾すべき悪しき習慣のみが念頭に置かれているとは思えない。アルガンは、カトルメールの模倣に関係する項目を十分に了解し賛同しているとすれば、悪しき習慣としての皮相な模倣と自然の模倣を明瞭に識別した上でここで論究されているはずである。

類型の図式化傾向や蓋然性の恩恵により、価値判断としてのモデルの選択による個人的な創作行為に対する悪影響が回避されることが可能とされる。アルガンによれば、模倣は類型の反復に等しく、それは創造過程を排除する。逆に言えば、彼によれば、創造過程を台無しにしないためには、類型の受容が成就されなければならないが、類型が単純に反復される形での模倣は回避すべきものである。あるいはまた、創造過程そのものが本質的にそうした意味での模倣を駆逐するということになる。類型の受容の契機は歴史的判断の中断の契機、つまり「判断中止」の契機であり、外見上は否定的であるが、その実は新たな価値の形成へと向けた、いわば「創造的意識の志向性」に耳を傾けるためのものであり、類型そのものの「曖昧性」、「図式性」と共にこの否定性は、極めてポジティブなものとして機能する。

しかし、我々のこれまでのアルガンのための弁明にも拘わらず、「類型は受容されるのであって、模倣されるのではない」と彼が語る時、前章で論究したように、類型と模倣、快、自然の間に読み取るべき関係が、アルガンにおいては十分には考慮されていないと指摘せざるを得ない。カトルメール自身はこの点について「従って建築家が自らに与える諸規則は二重の基礎、つまり類型の明確な模倣という基礎と自然の理念的な模倣の基礎の上に横たわっている」²⁵⁾と語ったり、あるいは既に我々が「2.3 自然の模倣と根本的構造としての類型」の中で論じたように、アルガンよりも深い関連づけを行っていた。彼はとりわけこの点では、カトルメールの類型概念の包括性、全体性を越えるものでは有り得ない。それはまた、後述するように、アルガンの思想の根幹においてひとつの大きな問題点を引き起こす原因ともなるのである。

3.4 創出の基底としての類型とその平板化

アルガンはモデルと類型の識別をしながらも、ブラマンテを例に挙げ、類型の歴史的側面と創造的側面への問題を発展させるために、まず以下のように続けている：

「類型を設計企図及び形態的創出の出発点であると仮定しても、歴史の資料への照合に対する芸術家の関心を汲み尽くしはしないことは明白である。しかしそれによって芸術家は、ひとつの決定づけられた芸術的形態をモデルと捉えたり、あるいは逆に拒んだりすることを妨げられるものではない。ブラマンテのサン・ピエトロ・イン・モンテリオのテンピエットはこの過程のひとつの古典的な例である。事実こ

れは、ひとつの類型に、正確にはウィトルウィウスが記述している（第四書、第一章）円形神殿（ペリプテロ）の類型に明らかに由来しているが、しかし歴史的なモデル（例えばティヴォリのシビラの神殿）を通じて類型の抽象化を統合し、そして最後に、時には類型として、そして時にはモデルとして定置されようとするのである。実際に、「理念的な」、本質的に「典型的な」古代や、形態的なモデルの価値を有する歴史的な古代を同定し、あるいは融合的に統一しようとする熱望は、ブラマンテの古典主義に固有のものである。実践的に逆の場合が新古典主義によって与えられている。それは建築ではなく建築類型学をモデルと捉え、その結果、諸類型の素材的な転記に過ぎない作品を産出することになった。」²⁶⁾

芸術家といえども（あるいは芸術家だからこそ）カトルメールの語るように「如何なるジャンルにおいても無からは何も生じない」という意味において、類型が出発点であることと「歴史の資料への照合」とは、本来は互いに矛盾対立するものではない。また、ここでの記述はアルガンにおいては芸術家あるいは単体の建築に関与する建築家の場合に限定されているが、我々にとっては、いわば根本的構造としての類型の意識化と、それが現実化されたものの変異体が沈積したものとしての類型学的歴史資料の参照という、建築や都市の生成の本質に関わる重要な契機を含意する。

「芸術家」は、類型、モデル、類型学的沈殿物の中を遊動する自由を有しているのである。この遊動の内容にこそ、創出の微細と情熱が隠されている。ブラマンテの古典主義の「固有語 Idiom」、記号論の意味における「個人語 Idiolect」、従ってまたそれぞれの都市の固有性や都市建築的方言、その内部の各地区や各街区の特質、歴史的形態的场所性もそこに基づいているのである。都市建築もまた、「歴史的なモデルを通じて類型の抽象化を統合し、時にはモデルとして定置される」のである。ブラマンテの古典主義に固有のものとして指摘されている「「理念的な」、本質的に「典型的な」古代や、形態的なモデルの価値を有する歴史的な古代を同定し、あるいは融合的に統一しようとする熱望」は、その強弱や内容は異なるとしても、あらゆる芸術的行為、そして都市建築的営為の源泉である。デュランやカトルメールと共に我々が古代の模倣、巨匠の模倣として探求し、更にカトルメールの類型概念に基づいて詳論してきたものが、ここで、より具体的に「核」としての類型と関係づけられていると思われる。しかしアルガンにおいては、芸術一般の問題としてであって都市性に関わるものではない上に、「自然」にまで還元されてはいないことを改めて指摘しておかなければならない。

とはいえここでの彼の議論は、カトルメールの論点をより具体的に発展させている点は、評価しなければならない。その成果のひとつが新古典主義への「それは建築ではなく建築類型学をモデルと捉え、その結果、諸類型の素材的な転記に過ぎない作品を産出することになった」という適切な批評であるだろう。この批評は、建築の様式や思想の歴史に出現した、例えばネオ・ゴシックなど

は勿論、現代のポスト・モダニズムやヴェンチュエリの「曖昧性」、ヴァナキュラリズムやリゾナリズム（地方主義）、ナショナリズムにも共通するものを指摘している。しかも都市の構造レベルにおけるいわゆる歴史主義的アプローチの大半のものへの批判ともなり得るだろう。問題は、諸類型の素材的な転記や表面的な照合に拘泥するのではなく、類型そのものの構造を意識化し、その歴史性の展開として沈殿した参照体系を蘇生させることにある。それはアルガンの言葉に従えば、「類型学は「概念の」基底を再現するものであって、この基底の上にこそ芸術家の形態的錬成が必然的に据えられる」ということを知ることである。我々にとっては、究極的には模倣すべき「自然」に立ち帰ることに他ならないのであるが、アルガンはそのことにはまだ気づいていない。

3.5 アルガンにおける類型と創出の二項対立的限界

ブラマンテの例を引き合いに出した後で、アルガンはこの論稿での最大の関心である「歴史との関係における芸術家の位置」、つまり歴史と創出との関係について次のように考察する：

「かくして、歴史との関係における芸術家の位置は、類型学の契機と形態的決定の契機という二つの契機を有していることが明らかになる。類型学の契機は非蓋然的「非プロブレマチック」な契機であって、その中でこそ、芸術家は幾つもの資料を結合し、共通概念の総体あるいはイメージの歴史遺産を、それらのイデオロギー的あるいは意味作用的な、多かれ少なかれ明瞭な内容と共に、彼自身の仕事の基底ないし前提として画定するのである。この契機は、形象的芸術におけるイデオロギー的・構成的な「主題群」の契機と比較することができる。逆に形態的決定の契機は、過去の全く精確な形態的諸価値の参照を含意する。そしてこれらの価値の上で、暗々裏に芸術家はひとつの価値判断を定式化するのである。しかしながらこの判断もまた類型学を含意することは明らかであるし、我々は確定された形態的解決策上でひとつの価値判断を定式化する時、芸術家がそれを想像しつつそれに結び付けられた類型学的図式を超越した方法を、暗黙のうちに我々は判断するということもまた明らかである。」²⁰

このようにアルガンは、まず類型学の契機と形態決定の契機を想定する。類型学の契機を通じて、芸術家は資料を結合し、共通概念の総体あるいはイメージの歴史遺産を（カトルメールに従って、問題を対象同士の関係ではなく、概念あるいはイメージの諸関係に注意深く限定している）、それらのイデオロギー的あるいは意味作用的な、多かれ少なかれ明瞭な内容と共に、彼自身の仕事の基底ないし前提として画定するとされている。イデオロギーと意味作用に言及しているのも、一方では、今世紀に発展された政治思想や言語学、象徴形式の哲学などの分野の成果が取り入れられているばかりでなく、類型学が単なる歴史的形態的な語彙の対象間的引用のための資料庫ではなく、カトルメールの指摘に従って、概念やイメージの、あるいは歴史性そのものとしての意味の沈殿化と結晶化、解体の運動として捉えようとしているからである。他方、形態的決定の契機は、芸術家に価値判断の定式化を可能にさせる過去の形態的諸価値の参照を

含意するとされる。

しかし、このようにアルガンは、二つの契機を明確に区別しようとしているにも拘わらず、定式化されるべき価値判断も歴史的側面を有しているからこそ類型学を含意すると述べ、両者の識別は本質的に曖昧にされる。これは歴史と創出、類型のモデル化的側面と脱構築的側面の区別を十分に了解しないまま、両者の単純な二項対立を行ったためであると思われる。アルガンは、こうした理論的曖昧さを便宜的にあるいは漸近的に解消しようとする。あるいは、それを意識的に隠蔽することになるとしても、類型学的図式の超越という形でこうした類型と創造との対立と重層性の問題を移管させようとしている。

我々にとっては「類型学的図式を超越した方法」とは、類型という核のもとに沈殿された意味を蘇生させた上で、それを脱構築することである。実際、アルガンは、これに続く部分で、他の論者の思想を評定する形で「類型を超克する形態的創出」という表現を用い、一時的にせよ、両者の調停の緊張感に耐えられなくなり創造の優位性を間接的に認めることになる：

「--これらの著作の中で、建築類型が実存の実践的及びイデオロギー的諸要求の総体との関係から形成された「空間的分節」の図式であるとの考えが強調されている。こうした観点からは、現実の諸要求に対して類型が全ての具体的価値を喪失した場合に、これらの現実の諸要求への応答こそが、類型を超克する形態的創出であるということが引き出されるだろう。従って、芸術家が応答するように義務づけられている現実の要求は過去の中にその諸前提を有しているという限りにおいて、類型への申し立てが産出されることになる。それについてのひとつの意味深い例が、近代の聖なる建築と工業建築との間の照合によって与えられる。工業建築は、全く新しい要求に応じながら、建築形態の継起的発展を通じて大きな重要性を持つ新たな類型を創造してきた。過去に強力に同定された諸要求に応じる聖なる建築は、全ての芸術的価値を欠いた類型学的反復か、あるいは全ての類型学的図式と関連した解放の試み（例えばル・コルビュジエによるロンシャンの教会）を引き起こしてきた。歴史的類型の近代的発展は殆ど現われることはなかったにもかかわらず、この後者の解放の試みは、実際には、最も受容不可能なあるいは最もはかない反-類型の提起へと導かれた。

それ故結論として、創造の過程において、類型学の契機と創出の契機の間の統一性と根本的な連続性の存在を我々は認めなければならないということになる。その場合この創出は、類型の図式的性格における過去の、沈殿された、そして総合された解決策の批判と止揚を通過した、現実の歴史的状況の諸要求への応答の契機に他ならない。」²⁰

「現実の諸要求に対して類型が全ての具体的価値を喪失した場合に、これらの現実の諸要求への応答こそが、類型を超克する形態的創出である」とされているが、類型が「全ての具体的価値を喪失する」場合など実際には有り得ない。また、「現実の要求は過去の中にその諸前提を有しているという限りにおいて、類型への申し立てが産出される」と記述されているが、この場合には類型の本質が「過去の中にその諸前提を有している現実の諸要求」へと縮減される。これらは、間接的な表現であるとはいえ、何れも創出と類型の不可分な関係の不十分な理解によるものと思われる。実際、カトルメールが「創出 Invention」の項で述べていることが深化されるどこ

ろか、寧ろアルガンがこの項の重要な内容を参照していないか、あるいは的確な解釈を怠ったようにさえ思われるのである（前章を参照）。

類型と創出の間で、創出の契機の優位性に僅かながらも傾いたアルガンの意識は、再び両者の統一性と連続性の認識に立ち戻るといふ形で、それらの決定的な乖離を避けようとする。しかし創出は類型の止揚を通じて新たな歴史的状况の諸要求への応答として提起され、遂には創出における類型の役割は、類型に関するアルガンの数々の重要な指摘にも拘わらず、混濁した状態に放置されながらも外見上は明晰であるという印象を押し与える、半ば通俗的な議論の水準にまで後退させられたのである。

4. 結論—類型の間テキスト性と脱構築としての創出

省察すれば、カトルメールによれば類型は「先在する萌芽」であり、歴史性の全ての運動を可能にする「核」である。この核の周囲に凝集され合体される「対象が受容した形態や変化」は、建築や都市の機能性をも含意する。先在する萌芽としての類型は、都市の建築の意味の固有な沈積のあらゆる位相の垂直の軸として作用する。そして建築の意味作用の賭けそのものの全ての運動あるいは審級は、類型という「核」の周囲において初めて捉えられる。（2.1）

模倣が間テキスト性の現れ方、表し方であるとするなら、類型は間テキスト性そのものを保証する核、あるいはその原因である。第一原因としての自然が、時間性や人間の感性的理念性の衣をまとうことによって、「根本的構造」としての類型となる。自然を構造化する理性の働きから結実するものが根本的構造としての類型である。従って、自然を模倣することから生じる「快」は、類型の存在を暗示することに基づいており、自然の模倣は、類型を具体化したものと、つまり類型学と、密接な関係を有する。自然と類型という、いわば第一原因と理性的原因が、形態や空間という現象の現象性（意味）として、歴史性（意味）として、感性的に把捉されることによって「快」が生まれるのであり、その特殊なものとして「美」が意識される。この快は、人間の共同主観性に根ざしながら、時と共に生成され熟成される集団記憶や共同言語性を伴うことによって、人間の自己疎外や実存的「不安」を和らげる働きをも有するのである。（2.2）

「創出」との関係においては、対象同士の関係としての逸脱や差異性つまり形態的語彙の変形や解体ではなく、対象のイメージや類推同士の逸脱あるいは差異化の可能性を内包する歴史性と伝承可能性の契機こそが類型の本質である。そこに類型意識に基づかない創造の待望と、類型との相互作用によって初めて可能とされる類型論的脱構築との相違が見い出される。永続的な建築類型の翻訳によって永続的な言語構造としての類型に基づいた先

行の類型学の絶えざる変容と相互翻訳によって、沈殿された意味は蘇生され、その上で脱構築が可能とされるのである。（2.3）

アルガンは、カトルメールの著作を参照しながら、類型の秘匿性と神秘性はそのア・プリオリ性にあるのではなく、日常的な「一連の先例からの演繹性」によると見做している。それは理念的客観性に基づく純粋な観念的範型への同一化的寄託にではなく、「互いに明白な形態的及び機能的類推を有する一連の」不純な歴史的沈殿物が存在するという事実性とそれらを照合ないし重合しようとする人間の欲求にこそ隠されている。類型という、形態の変異体の総体の、ひとつの共通の基本形態への還元及び、歴史的に逆進する合目的過程のテロスは、まずカント的な図式として与えられる。それはア・プリオリで単純な構造枠でもア・ポステリオリな静的構造でもなく、「形態の変異体の可能性」を含意する動的で柔軟な構造として提起される。（3.2）

類型は、芸術的価値や形態的性格、特質を取り除き、それらをイメージや記号の価値に帰着させる形態的設計である。完遂され停止した過去の芸術がモデルとして機能することを辞める時に、類型が出現する。アルガンによれば、模倣は類型の反復に等しく、創造過程を排除する。逆に、創造過程を台無しにしないためには、類型の受容が成就されなければならないが、類型が単純に反復される形での模倣は回避すべきものとされる。あるいは、創造過程そのものが本質的にそうした意味での模倣を駆逐する。しかし「類型は受容されるのであって、模倣されるのではない」と彼が語る時、類型と模倣、快、自然の間に読み取るべき関係が、アルガンにおいては十分には考慮されていないことが明らかとなる。（3.3）

問題は、諸類型の素材的な転記や表面的な照合に拘泥するのではなく、類型そのものの構造を意識化し、その歴史性の展開として沈殿した参照体系を蘇生させることにある。我々にとっては、究極的には模倣すべき「自然」に立ち帰ることに他ならない。（3.4）

アルガンは類型学の契機と形態決定の契機を明確に区別しようとしているにも拘わらず、定式化されるべき価値判断も歴史的側面を有しているからこそ類型学を含意すると述べ、両者の識別を本質的に曖昧にしている。彼は歴史と創作、類型のモデル化的側面と脱構築的側面の区別を十分に了解しないまま、両者の単純な二項対立を行ったために、間接的な評定であるとはいえ「類型を超越する形態的創出」という表現を用い、一時的にせよ両者の調停の緊張感に耐えられないからこそ創造の優位性を認める。類型と創出の間で創出の契機の優位性に僅かながらも傾いたアルガンの意識は、再び両者の統一性と連続性の認識に立ち戻るといふ形でそれらの決定的な乖離を避けようとする。しかし創出は類型の止揚を通じて

新たな歴史的状況の諸要求への応答として提起され、遂には創出における類型の役割は、素朴な議論の水準にまで後退させられる。(3.5)

両者の類型概念の吟味を終えた我々は、沈殿された意味を蘇生させること(類型の意識化)もなく試みられる脱構築(創出)は、無意味でかつ不可能でさえあり、逆に、脱構築されることを望まない蘇生は、類型の生気を枯渇させ、モデルの温存に逃避しようとする反創造的意識以外の何ものでもないということを想起せねばならない。

類型は、歴史性を巡る間テクスト的特質をその本質とする。類型こそが歴史性即ち意味の運動を可能にするのである。類型の間テクスト性を意識化することは、沈殿された意味そのものを賦活させ、それらの諸関係を画定しながら布置し直すことである。そしてそうした類型の間テクスト的構造の上に蘇生作用によって布置し直された類型学的沈殿を、ずらし、歪め、逸脱させ、変形させ、そして脱構築することこそが、本来はアルガンの場合においても「創出」と称されつつ措定されるはずのものであった。こうしたアルガンの思考の不十分さを生み出す原因のひとつは、カトルメールが「従って建築家が自らに与える諸規則は二重の基礎、つまり類型の明確な模倣という基礎と自然の理念的な模倣の基礎の上に横たわっている」と語った時の模倣すべき自然と、類型、模倣、創出との関係を、アルガンが適切に捉えていなかったことにある。つまりカトルメールの語る「二重の基礎」は、アルガンにおいては、自然の理念的な模倣という根幹の部分に欠いたまま、一方の「類型の明確な模倣」の中でのみ構築された、類型と創出の二項対立という脆弱な基礎に変貌させられたのである²⁹⁾。

カトルメールによって建築思想的な深化が見事に達成されるまでは、デュランを含めて、建築や都市に関する思想や言説においては、専ら建築の起源や絶対美の規範が追い求められていた。カトルメールによって初めていわば歴史と真理の総合という形で覚醒された類型意識は、もはや超時間的真理としての美や原型のようなア・プリオリな権威をひたすら求めることはなく、逆に汎時間的、歴史相対的な規範や公準などのア・ポステリオリな価値や形式をのみ資格認定することもない。模倣すべき自然の超時間性と、「先在する萌芽」としての類型という核が保証する汎時間性とが織り成す推移(差異)にこそ注意を向け、両者の交錯を歴史性=意味そのものの運動として捉えることこそが、都市や建築、つまり都市建築の全貌を、最も理念的に、にも拘らず最も具体的、形態的に同定し記述する方途となるのであり、その限りにおいてこのような間テクスト的な類型意識は創出の基底をも構成することが可能となるのである³⁰⁾。

註

- 1) この論文は、フランス政府科学部門給費留学生として1982年7月から87年11月までパリに滞在していた際の、パリ・コンフラン建築大学におけるD.P.L.G.取得論文及びパリ・ベルヴィル建築大学におけるC.E.A.A.取得論文を基に、限定された主題について再解釈しものである。
- 2) 拙稿：J.N.L.デュランの模倣概念について、都市建築の沈殿された意味の蘇生とその脱構築(1)、日本建築学会計画系論文集、第469号、1995.3. pp.221-228. 及び、A.Ch.カトルメール・ド・カンシーの模倣概念について、都市建築の沈殿された意味の蘇生とその脱構築(2)、日本建築学会計画系論文集、第475号、1995.9. pp.195-202.
- 3) A.Ch. Quatremère de Quincy: Dictionnaire historique d'architecture, 2vol., Paris, 1832, 所収：De l'imitation, Archives d'Architecture Moderne, Bruxelles, 1980, p. LVIII. 翻訳は全て筆者による。また、訳文上の傍点及び「」も筆者による。以下同様。類型のこの有名な定義は、後述するようにアルガンの論稿においても引用されている。この「類型」の項の初出は、以下に見出される。
A.Ch. Quatremère de Quincy : Encyclopédie méthodique, Architecture, tome III, Paris, 1825, pp.543-545.
- 4)、5) Ibid., pp.LVIII-LIX.
- 6) Ibid., p. LIX.
- 7) カトルメールの自然、理性、快を巡る模倣概念については、拙稿：A.Ch.カトルメール・ド・カンシーの模倣概念について、前掲註2、のとりわけ第5章「模倣と自然」を参照。
- 8) ジャック・デリダ Jacques Derrida によれば、意味 Sens とは現象の現象性 Phénoménalité でありそれはまた歴史性 Historicité に他ならない。この点については別の機会に詳述したい。
- 9) カトルメールの読解の中から、類型や類型学についての多くの論稿が成されてきたが、類型と自然との関係については勿論、類型と模倣、快との関係を論じるものは、不思議にも殆ど全く見られない。多くは、類型と類型学あるいはモデルとの関係を論じている。後述するアルガンやラファエル・モネオ Rafael Moneo、アラン・コフーン Alan Colquhoun、アンソニー・ヴィドラー Anthony Vidler の論稿も例外ではない。類型や類型学に関する彼らの著作については別の機会に論究したい。
- 10) 建築や都市、あるいは自然の実存的諸概念や、疎外、不安等との関連については、ここでの論点とは必ずしも一致するものではないが、同一化 Identification や定位 Orientation の概念を主題としながら、クリスチャン・ノルベルグ=シュルツ Christian Norberg-Schulz が一連の著作の中で論じている。
- 11) 後述するように、実際、アルガンもカトルメールの類型とカント的な図式との関係を示唆している。イメージが記号から生まれるのであってその逆ではないと考えるカトルメールは、伝統との繋がりにおいては、革新的な位置を占めており、やがては新たな美学的伝統を主導することになる。カトルメールの思想のカント的側面については、白井秀和の一連の論文を参照。尚、カトルメールの思想の全体像を吟味したものとしては以下を参照。白井秀和：「カトルメール・ド・カンシーの建築論--小屋・自然・美をめぐる--」ナカニシヤ出版、1992、Lavin, Sylvia: Quatremère de Quincy and the Invention of a Modern Language of Architecture, The MIT Press, 1992.
- 12) 従ってアルド・ロッシ Aldo Rossi が、カトルメールによって錬成された類型の概念の再解釈を基礎にして建築的類型学概念を同じように導入したのも偶然ではない。Rossi, Aldo: L'architettura della città, Marsilio Editori, Padova, 1966、大島哲蔵、福田晴虎共訳「都市の建築」大龍堂書店、1991.12. を参照。
- 13) 模倣の理論は、ロシア・フォルマリズムの審級と同じように、建築理論の現代のコンテクストにおいて意味論的な革新を示唆している。模倣による異化を生じさせる集団記憶の地平において、模

傲の理論は古代のものと新しいものとを直面させるからである。デュランにとってそれは、「産出」の新しい技術への適用と新しいコンテクストへの準備を目的とする既存のコンテクストの変形あるいは変容として立ち現われている。カトルメルにとっては、永続的な建築類型の翻訳によって、より正確に言えば、永続的な言語構造としての類型に基づいた、先行の類型学の絶えざる変容と相互翻訳(類型学)によって、起源の問題へと還元される。我々にとってそれは、コンテクストの歪みあるいは共時的及び通時的の矛盾の問題に他ならない。建築的現象の現象性としての歴史性を基礎とする差異と反復の間の建築的意味の戯れに他ならない。我々はこれを、共同主観性に関係づけながら、建築の理念の起源へと向かうある種の脱構築として問うことになる。

- 14) Argan, Giulio Carlo: *Sul concetto di tipologia architettonica*, in *Progetto e Destino, Il Saggiatore*, Milano 1965. 英語訳は、Translated by Joseph Rykwert: *On the typology of architecture*, *Architectural Design*, pp.564-565, 1963. 12. リクワートによれば、この論稿は、最初は、ハンス・ゼードルマイヤー Hans Sedlmayr の誕生日の記念にミュンヘンで出版された論文集のひとつに収められたものである(edited by Karl Oettinger and Mohammed Rassem, C.H.Beck, 1962, Munich)。伊語初版が1965年に、英訳が1963年に出版されていることからすれば、英訳は独語版から翻訳されたことも考えられる。65年以前、とりわけ62年の独語版の出版前後に伊語の草稿が存在し、それによって英訳がなされたとも考えられる。従って原著を独語版とするか65年の伊語版とするかについても判断するのは困難であると思われる。仏語訳としてはクリスチャン・ドゥヴィレール Christian Devillers が1965年版から1984年10月に訳したものが最近まで研究者や建築家の間で未出版の資料として用いられていたが、最近、エルザ・ボナン Elsa Bonan によって翻訳され出版されたアルガンのこの論文集に、ドゥヴィレールの仏訳と同じタイトルで収められている。Argan, Giulio Carlo; Traduit de l'italien par Elsa Bonan: *Sur le concept de typologie architecturale, "Projet et destin---Art, architecture,urbanisme"*, Les Editions de la Passion, Châtillon, France, 1993, pp.57-61. 筆者による日本語訳は、主にドゥヴィレールとボナンの仏訳に拠っている。両仏訳は概ね一致しているが、下記註19のアルガンによるカトルメルの引用箇所、つまり上記註3の引用文中の「"類型"という語は、転写すべきかあるいは完全に模倣すべきあるもののイメージを現すよりも寧ろ、それ自体モデルへの規則に供するはずのある要素の観念を現す」の「転写すべき」の部分、カトルメルの原文やアルガンの引用では"à copier"となっているのに対して、ボナンの仏訳では"à espérer"と誤訳されている。1977年の伊語版も存在し、両者がどの版を訳しているのかにより、誤植その他の相違が起こると思われる。尚、リクワートの英訳は、原文を平易な表現に変形しようとする余り、多くの意識を含んでおり、原文のニュアンスを必ずしも適確に表現していない。例えば、註28の引用箇所後半の「全ての類型学的図式」は、仏訳では共に"tout schéma typologique"となっているのに対して、英訳では"all typological precedent"と変えられている。その直後の結論部分も、仏訳と英訳では大きく異なっている(註28を参照)。また原文にはない部分が散見される。例えば、下記註24の引用箇所の冒頭の部分「しかし類型がひとつの図式であり--」は、仏訳は共に"\"Mais si le type est un schéma---\"と訳されているのに対して、英訳では"\"But if the 'type' is a schema or grid ---\"というように、原文にはない"or grid"という言葉が付加されている。

15) Argan, Giulio Carlo; Traduit par Elsa Bonan, op.cit., p.57.

16)、17)、18) Ibid., p.57.

19) Ibid., p.58. この部分については、上記註14を参照。

20) Ibid., pp.58-59.

21) Ibid., p.59.

22) 構造レヴェルについては例えば以下の文献を参照。

Norberg-Schulz, Christian: *Existence, space and architecture*, Studio vista, London, 1971. ノルベルグ=シュルツ、クリスチャン、加藤邦

男訳：実存・空間・建築、鹿島出版会、SD選書78、1973.9.

23) Argan, Giulio Carlo; Traduit par Elsa Bonan, op.cit., p.59.

24) Ibid., pp.59-60.

25) Quatremère de Quincy, A.Ch.: *Encyclopédie méthodique, Architecture*, tome I, Paris, Liège, 1788, p.121. この引用については以下を参照。拙稿：J.N.L. デュランの模倣概念について、前掲註2 p.222.

26) Argan; Traduit par Elsa Bonan, op.cit., p.60.

27) Ibid., p.61.

28) Ibid., p.61. この部分は、上記註14でも指摘したように、ドゥヴィレールとボナンの仏訳とリクワートの英訳では、多くの点で異なった表現となっている。とりわけ結論部分の相違は重要であると思われるので、以下にそれぞれを示す。

ドゥヴィレールの仏訳：

C'est pourquoi, on conclura avec la reconnaissance de l'unité ou de la continuité fondamentale dans le processus d'invention entre le moment de la typologie et celui de l'invention, ce dernier étant seulement le moment de la réponse aux exigences de la situation historique actuelle, à travers la critique et le dépassement des solutions passées, sédimentées et synthétisées dans le caractère schématique du type.

ボナンの仏訳：

En résumé, il faut reconnaître l'unité et la continuité fondamentale, dans le processus d'idéation, des phases de la typologie et de l'invention, cette dernière n'étant que la phase de la réponse aux exigences de la situation historique du moment, à travers la critique et le dépassement des solutions passées, sédimentées et synthétisées dans le schématisme du type.

リクワートの英訳：

The conclusion must be that the typological and the inventive aspect of the creative process are continuous and interlaced---the inventive aspect being merely that of dealing with the demands of the actual historical situation by criticizing and overcoming past solutions deposited and synthesized schematically in the 'type'.

尚、「類型を超克する形態的創出」の部分は、ドゥヴィレールの仏訳では"l'invention formelle qui dépasse le type"とされ、またリクワートの英訳でも"the formal invention which overcomes the 'type'"とされているのに対して、ボナンの仏訳では"l'invention formelle que le type dépasse"というように主客が逆転した形で訳されている。

- 29) この稿では「建築類型の概念について」に限定してアルガンの類型概念を論じ、その数々の意義深い指摘を評価し、カトルメルの思想を継承発展させた功績を讃えながらも、類型と創出の関係に対しての彼の曖昧な姿勢に注目し、その批判を試みた。しかし、彼のこうした姿態そのものが、近代建築における無類型的、擬類型学的な態度に対するアイロニーであり、また、現代的状況におけるカトルメルの思想のある種の楽観性に対する懐かしやかな抵抗であり意識的な躊躇であると考えることも可能であろう。その真意を探ることは、我々に課せられた今後の大きな課題のひとつであると思われる。その上で、アルガンの他の伊語原著作をも吟味し、何故彼が自然の概念を必ずしも適確に捉えることができなかったのかを論じなければならないと思われる。また模倣すべき自然については、これまでは例えば幾何学や大きさなどに関連して述べたが(上記註2の拙稿：A.Ch. カトルメル・ド・カンシーの模倣概念について、を参照)、都市建築に一層具体的に関係づけながら、それを詳しく論じることも必要であると思われる。

- 30) このような意味において類型は、都市建築を巡る個人や共同体の定位や同一化を保証する重要な役割を担い、生活世界における都市建築の意味の沈積と推移の解読と創出を可能にする。つまり、類型という軸の周辺で螺旋的に運動する都市建築の意味こそが、あらゆる人々の建造行為、生活と思考を、つまり建てること、住まうことと考えることを可能にするのである。この点についても別の機会に詳論したい。

(1995年8月14日原稿受理、1996年6月7日採用決定)